

~~~~~いま、子どもたちは~~~~~

## ははこ 母子のいま

### (2) 親子の状況

山崖 俊子

はじめに

今年の二月四日文部省から「子どもの体験活動等に関する国際比較調査」の結果が報告された。これはその目的を「日本及び諸外国の小中学校の児童生徒の家庭や地域での生活実態等を把握し、我が国の青少年の体験活動の充実を図るための施策の参考とする」というものである。詳細は報告書を参照されたいが、大まかなところは次の通りである。

①日本の家庭では、子どもたちのしつけが十分に行われていない。生活規律や社会のルール・道徳心に関して、父親からも母親からも家庭であまりしつけられていない。特に、「友だちと仲良くしなさい」「弱いものいじめをしないようにしなさい」「うそをつかないようにしなさい」などは日本の家庭が最も低く、「もっと勉強しなさい」ということも父親からも母親からもいわれていない。さらに、「近所

の人から叱られたこと」も最も少ない。しかし、「友だちとの約束を破ったこと」「学校の規則を破ったこと」は高い。

②日本の子どもたちは、総じてあまりお手伝いをしていない。特に、「買い物の手伝いをする事」「家の中の掃除や整頓を手伝う事」「ゴミ袋を出す事」と「布団の上げ下ろしやベッドの整頓をする事」のように煩雑なもの、体力を使うものについて低い。

③日本の子どもたちの友人関係は総じて希薄である。諸外国に比べて、「いじめを注意したこと」「友だちのけんかをやめさせたこと」「悪いことをしている友だちに注意したこと」「困っている友だちの相談にのってあげたこと」などが低く、友人との人間関係に積極的に働きかけるのを避ける傾向が目立つ。が、「友だちとけんかをしたこと」は最も多い。

これらの結果、すなわち子どもに対する親の関わり

り方についても子どもの行動・態度についても、筆者を大いに驚かせた。なぜならば普段相談場面で、あるいは親たちの学習会に招かれて知り得る親の状況・子どもの状況とはかなり異なっていたからである。最もこの調査は子どもを対象としたものであり、子ども自身の受け止め方であるから、親の関わりの実実は恐らくかなり実態とは異なっているはずである。しかし、それにしても……である。そしてその時あることに気づいたのである。

文部省の「子どもの体験活動等に関する

国際比較調査」の結果をめぐって

調査対象となっているのは小学五年生と中学二年生であるから、彼らの親たちは丁度三十代後半から四十代前半であろう。ということは、親たちが幼児期・学童期だったころというのは一九七〇年代から八〇年代にかけてということになる。当時の教育界

の状況を振り返ってみると、我が国では未曾有の高

度経済成長長期の直前で「期待される人間像」という言葉が生まれ、一九六〇年代から「不登校児」というそれまで見られなかった子どもたちの姿が現れはじめたのである。以来、「不登校児」の出現は止まるところを知らず、激増の一途を辿って現在に至っている。この現象に親たち・教師たちそして世間は大きい慌てた。何とかしてこの現象に終止符を打たねばならないと考えた。教育相談所は不登校児の相談であふれ返った。戦後の目まぐるしく変わる状況の中で、世間は期待すべき「子ども像」をどうとらえたらいいか、どのような子育てが理想なのか誰もが迷っていた。従って、その時その迷いに対する回答として「不登校児にしないような子育て」に飛びついたのも不思議ではない。当時、「不登校」の原因論をめぐっての話題が、精神医学会・心理学会・教育学会ではもちきりだった。筆者らも例外で

はなかった。

実は今回の調査結果を目にした途端、そのころの「不登校児にしないような子育て」を地で行ったような結果であったと思ったのは筆者の思い込みか偶然であろうか？ 当時の筆者の職場は「児童臨床相談室」であり、「登校拒否の発生機序について」（註）という不登校児に関する初めての論文を出したのが一九七五年であった。

### 「不登校児にしない子育て」をめぐって

筆者らがまとめた「登校拒否の発生機序について」という論文は、当時、教育界からかなり注目された。その主旨は、筆者らが当時相談室で関わった不登校児三十四名について、彼らの幼児期・学童前期・学童後期の生活史に関して、その両親に対して行った質問紙調査の結果をまとめたものである。調査結果は、彼らに共通のエピソードとして①三歳前

後の反抗期がなかった②自己主張が弱く、素直であった③一貫しておとなしい子どもであった④友だちとほとんどけんかをしたことがなかったという、一言で言うならば、いわゆる「いい子」で大人から見れば手のかからない子どもであったというものである。

この結果は当然といえば極めて当然であり、「子どもが子どもらしく」生きている姿、すなわち「子ども性」の条件は①自らの思いを率直に表現する、とらわれない自由な姿であることと②大人に保護してもらわなければ一人では生きていくことができず、従って、大人に合わせ従順になることで受け入れられる姿、言い換えれば①内的適応と②外的適応の両面の育ちが必要なのだが、前述の不登校児の共通した特徴は外的適応の育ちばかりが目につき、内的適応の育ちが押さえ込まれているという強い印象を受けた。その結果、思春期という抑えきれない

「性」の衝動、そしてそこから突き動かされる「自我」の芽生えを内包させた子どもたちは、それまでのバランスを欠いた白らの状況を維持しきれなくなり、彼らの本来の姿を露にせざる得なくなるのである。その「自分らしく」あるうとする姿が「不登校」という形になって現れたと考えると、むしろ「不登校ができた」ことを祝福すべきであろうが、できうるならばことさらエネルギーを必要とする「不登校」にはならない方が楽に生きられるというものである。

いずれにしても筆者らも不登校児の共通した成育歴から得られた「教訓」を、できうるなら



ば多くの子どもたちに対して、いわば「予防的に」生かすことができないものかと考えたのである。従って当時、様々な書物に、あるいは様々な場での上のことがらを伝えたものである。その結果、多くの親御さんたちから「家の子は兄弟喧嘩が絶えませんから自我の育ちは順調ということですね。ですから不登校にはなりませんね」「家の子は我が儘で何でも欲しがり、買ってもらうまで納得しません。ということでは自我が育っているということですね」等々の質問を受けた。このことは我々の主張に対して極めて大きな「落とし穴」があることを示唆していたのである。

先の文部省の「子どもの体験活動等に関する国際比較調査」の結果を見て、実は前述した筆者らの「登校拒否の発生機序について」の論文を思い出したのである。まさに「不登校児にしないための」条件を満たしていた結果だったからである。つまり

「外的適応」を「目の敵」にし、ことさらに「いい子でない子」に仕立て上げていく関わりが見えてくるのである。「弱いものいじめ」をしても「嘘」をついても「友だちと仲良く」しなくても「友だちとの約束を破って」も「校則を破って」も、それはむしろ「良い育ち」の証と考えたのだと思われる。これらの推測が当たっているとすれば、筆者ら、当時のいわゆる「子育ての専門家」の責任は計り知れないものがあつたといえる。

### 「不登校児にしない子育て」という発想の大きな落とし穴

「大きな落とし穴」には二つの問題点があり、一つには子育てにとつて例え善意から出発したものであっても「くさせないように」「くにならないように」という、いわば予防的姿勢は意図的かつ操作的であるということである。例え保護されるべき幼い

存在であっても、子どもは親とは別個の一つの人格を備えた存在であり、親が最大限子どもに歩み寄って、子どもの立場に立とうとしても立ちまされるものではない。「帯に短したすきに長し」である。周囲からの操作さえなければ、誰しも子どもであろうと自分にとって最も相応しい選択・決定をするものである。勿論放りっぱなしはまずい。放るのではなく、その時々の子どもの感覚を最大限尊重し、信頼し、見守る中で、結果的に子どもにとって好ましくない選択をしたときは自ら気づいて自ら建て直すのを、また見守ればよいのである、というより、そうするしかないのである。その際、子どもは親から信頼され見守られているその目を支えに、自分にとってよりよい選択・決定を目指して試行錯誤を繰り返すことができる。

その際重要なことは、親にとってギリギリ受け入れられないところでは、きちっと「枠」つまり限界

を示すことである。これこそ子どもにとって真の安心感につながる。大きな枠の中で安心して思い切り羽ばたけるからである。いい加減な気持ちで与える「枠」は役にたたないどころか親に対する信頼を失う。その時々の子どもの心からの思い、「本気」のかかわりは必ず子ども心に届くはずである。「前もって」とか「できることなら」といった対応は決して響かない。その時々の子どもの真剣な眼差しによる「守り」と「枠」こそが「いざ」となったときの守りを確信できて子どもを解放するのである。

そう考えると、先にも述べたように「不登校」は親や世間は困惑するが、子どもにとってはそうすることでそれ以上辛い状況が続けることに終止符を打ったわけであり、極めて好ましいことと評価することができる。「不登校」をあつてはならないこと、何としてでも避けなければならないことと考えて、「登校刺激」も含めて周囲から絶え間なく軌道修正

を行っていくと、自分で自分の人生に責任をもてなくなる。辛い選択・決定でも自らの判断であえてそれを選択したということは、自分にとって少しでも良い状況に向けて自力で自分自身を軌道修正する「力」があつたということの証である。

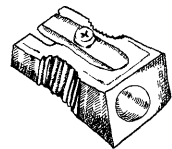
「不登校」さえもできなかった子どもはやがて力尽きて、自らの「身体」を滅ぼしたり自らの「精神」を滅ぼすことにもなりかねない。決して「不登校」を礼賛するわけではない。できうることなら不登校にならないで済ませられた方が生きていくのは「楽」だったはずである。「不登校」は子どもが積極的に意図的に選択・決定した行為とは言えず、結果的にそうなってしまったといった方が当たっている。すなわちストレートな自己表現つまり「表メッセージ」ではなく、いわば「裏メッセージ」に頼らざるえなくなった姿と言わざるをえない。しかし、自分自身の「建て直し」に向けて他からの働きかけ

によるのではなくて、自らの意思で一步前に進み始めたことは飛躍である。

二つ目には例え「うしよう」と思ったとしても、実際にその

ように行動できるものではない。我が身を意識的にコントロールすることは所詮無理なことであり、本来の自らの身体を感じる「思い」と知的に考えている「意識」との間のギャップ、すなわち「自己不一致感」は、本人にとって我が身が引き裂かれる思いであるはずであり、本人の感じとしては不快感・不快感を感じているはずである。

従って、そのような自己不一致の状況にある大人に関わられたとき子どもはどのように感じるだろうか？ 受け手である子どもからすれば極めて不自然ということになる。不自然であれば納得はいかない。結局、親に対する不快感を招くことになる。



頭で考えた「知」は説得力を欠くし、第一長続きしない。結局そうしかできないようにしかできないのである。「必然」の結果は謙虚に受け止めるしかない。心からの思い、すなわち「本気」であることは子どもに対して強い説得力をもつものである。

### おわりに

現代の日本の親たちの子どもに対する態度が諸外国に比していい加減であるという調査結果が発表されたが、いい加減というより、親たちの子育てに対する不安の現れという印象をもった。戦前から戦後、五十年も経過したとはいうものの、何を抛り所にしたらよいかモデルもなく、未だ確たるイメージももてないまま、子どもの状況は今まで見られなかった様々な揺らぎを示している中で、取り敢えず戦前の頑固な親はいけない、不登校を生み出す親の関わりはしないでおこう等、極めて利那的、短絡

的、そして操作的な親の姿が浮かび上がってくる。

それには筆者をも含めた我々子育ての「専門家」の責任は厳しく問われなければいけないが、だからこそ声を大にして言いたいのが、もっと「当たり前」の感覚を大切に、それぞれの親の思いで「イヤなもの」はイヤ、「ダメなもの」はダメと「本気」で「まとも」に子どもと向き合っていくことである。

親も含めて大人が「本気」でないのに、どうして子どもだけ「まとも」になれるだろうか。

(津田塾大学ウエルネスセンター)

### 註

「登校拒否の発生機序について」『小児の精神と神経』第十五卷、第二号、第三号（一九七五年）